

第二言語の授業における効果的・学習促進的な文化要素の探索

近藤ひかる

ウェスタンミシガン大学

要旨

本調査の目的は、日本語教育現場において教師・学習者双方から求められている日本の文化要素を見出すことであった。第二言語習得における文化要素の重要性・有用性は多く語られている。一方で、「日本文化とは何か」という質問に対する答えは一言では片づけられるものではなく実際にどのような文化要素が取り上げられるべきかという点については未だ一定の基準はなく、各々の教育機関及び教師自身による部分が多い。

このような現状を受け、本調査では日本語教師・学習者双方を対象として質問紙調査を行った。結果、双方が同じような文化要素を捉えていても教師・学習者という立場の違いによって着目する側面が違うことが示唆された。教師は文化要素をその背景にある *Perspectives* の視点から語るが多くあったが、学習者は実際に目に見えたり体験することのできる *Products* や *Practices* をより文化要素として意識しやすいことが分かった。

キーワード：文化 日本語教育

はじめに

「文化」という言葉は一般的に、人々の間で共通の考えや信条、習慣、マナー、価値観、伝統、行動パターンのことをいうと説明されている(Ziebka, 2011)。また、文化と言語は密接に関係しているとの指摘もされており(Otwinowska-Kasztelanic, 2011)、第二言語のクラスで文化を取り扱うことの重要性や利点を説く先行研究も多い。言語と文化は切り離せないものであり、学習者は異文化交流の際に陥りがちなコミュニケーションの行き違いや誤解を避けるためにもターゲット言語のみでなく、文化を学ぶことが必要とされている(Ziebka, 2011)。一方で、実際に何を以て文化と定義するかという点に関しては言語を教える教師個人に委ねられやすい部分である。したがって呈示される文化要素が一貫せず、文化を用いた言語教育の内容が統一されにくいというのが現状である。

上記の現状を受け、本研究では第二言語教育としての日本語の授業において適切で統一性の高い文化要素の探求を目指す。文化が言語教育の一環として用いられる場合、教師はその一面を切り取って提示することになる。Otwinowska-Kasztelanic (2011)は、文化というものは見方の角度によって変わるものだと指摘している。どの部分を切り取るのが正解なのか、学生のためになるのかという探求は「そもそも日本文化とは何か」という疑問に行き着く。言語が簡単には言い表せないのと同じように、文化もまた一言では説明できないものである。この多様性を払しょくするため、本研究では「日本語教育の現場で求められている日本文化の要素」に着目して調

査を進めることとした。「日本語教育現場で求められている文化要素」とはすなわち、現場に関わる教師や学生が捉える文化のことである。教師・学習者双方への調査から、それぞれが捉える文化要素の類似点及び相違点を探ることとした。Otwinowska-Kasztelanic (2011)は、言語教育における文化要素の位置づけについて、その不明瞭さについて言及しており、特に誰にとっての文化が教えられるべきか、どのようなトピックや視点が取り上げられるべきか、またどのようにステレオタイプが避けられるべきか、という点に関して疑問を投げかけている。本研究ではこれらをリサーチクエスチョンとし、それらの疑問に対する回答を、質問紙調査を通して求めることとした。

先行研究

言語と文化は切り離せないものであっても、これまでの第二言語教育では言語に重きを置く教育が行われてきた。しかし近年の外国語教育では文化教育に重点を置く流れが進行している。21世紀のインターネットの普及は情報の可動性を急速に押し上げ、その結果外国語教育に求められるものをも変えた(Piasecka, 2011)。新たな側面を迎えた今、言語教育自体を軽視することはできないが、文化教育に重きを置いた指導の中で言語を取得することは可能である(Piasecka, 2011)という視点が広がっている。グローバル化の進む社会の中で言語を学ぶことの重要性は言うまでもなく、人々が他の言語や文化を通して世界をより良く理解するためにアメリカの大学機関が担う責任は大きい(Modern Language Association, 2007)。Modern Language Association (2007)は、大学機関での学びを通して他言語・他文化に寛容で深い理解を示すことのできるグローバル市民を形成することが重要だと唱えている。

Cakir (2006)は語用論的立場から、文化理解が学習者の他言語理解を深め、より自然な単語や表現の選択を促進すると述べている。また Ziebka (2011)は、第二言語学習者は文法や単語に関する知識を蓄えるだけでは十分でなく、異文化や異なる価値観の理解を通してすぐれたコミュニケーションスキルを伸ばすことが必要だと主張する。Santayopas (2011)はタイと日本で質問紙調査を行い、同じ状況における双方の言語表現の違いを明らかにした。結果、ターゲット文化の理解なしには言語コミュニケーションに誤解が生じてしまう可能性を実践的に示唆し、状況に応じた適切な言語使用のための文化教育の必要性を論じた。このように第二言語教育における文化教育の重要性を実践的・論理的に論じる先行研究は多い。しかし実際に何を以て文化教育とするかについて論じた研究は、あまり多くみられない。

Otwinowska-Kasztelanic (2011) は学習者が自文化を改めて理解するために他文化との違いを比較することが有用だと述べている。言語教育における文化要素の取り扱いが学習者の他文化理解を強める。授業で扱われる文化要素は、必ずしも賞賛や憧れの的として扱われるべきではない。むしろ教師は、それらの文化要素を学習者の視野や可能性を広げるツールとして捉えるべきである(Otwinowska-Kasztelanic, 2011)。Derenowski (2011) は第二言語教育での文化要素の使い道として、文化要素そのものを知ること、その文化要素が人々の生活にどのように組み込まれているかを知ること、なぜその文化要素が重要視され、また受け継がれているのかを知ること、

及び他文化を通じて自文化に対する自覚を持つことの4種類を挙げている。これらの目的で文化要素を用いる際、その指導に伴うアセスメントが必要となる。

これに対し、Makino (2009)は具体的な文化要素の指導プランを提示している。同論文は「文化は言語に比べ流動性が高く曖昧なものであり、したがって原則が見つけにくい」という一般的な理解に疑問を呈し、そのような教師の共通認識こそが文化を教育材料として扱うことから遠ざけていると批判する。「第二文化習得」の重要性を説くこの論文では、さまざまな日本の文化要素を「Survival」と「Post Survival」に分け、第二言語学習者が日本へ留学した際にまず触れるであろう身の回りの文化（季節・気候・ライフスタイル・交通機関・家の構造など）を初級段階に学ぶべき文化とし、反対に伝統芸能やポップカルチャー・宗教観・政治問題・文学などのPost-Survival culture は上級日本語のクラスで扱うものと位置づけている。また文化要素の評価方法についても Makino (2009)は言及している。これらの評価段階に関しては、日本語教育現場での実践的な報告が期待される。

日本語学習者に対する文化の影響の実践的報告として、Fukunaga (2006)は学習者に対するインタビュー調査を行った。この調査は日本語学習者に文化（特にポップカルチャー）がどう影響しているかを解明する目的で実施された。インタビューの結果、調査対象者は全員日本のポップカルチャーに興味があるという共通点があったものの、その影響は様々な形で現れることが分かった。例えばある調査参加者にとって文化は言語学習そのものに対する意欲を促進するものであったが、他の調査参加者にとって日本文化は言語学習というよりもむしろ共通の趣味を持つ友人と知り合うツールとして作用していることが明らかになった。自身のインタビュー調査を通して、Fukunaga (2006)は学習者の視点を直に聞くことが教師に求められる姿勢であると述べた。学習者の視点からの日本文化を理解するには、直接学習者を対象とした調査をすることが必要不可欠である。

一方本調査では、学習者の視点獲得と同時に教師自身の視点も再考することを目的とする。Fukunaga (2006)は前述の論文で、教師自身が捉えている文化要素と学習者がみる文化要素に違いがある可能性を指摘している。その上で、教師自らの持つ文化についての観念を浮き彫りにする意味でも、学習者の意見を聞くことは有益だとしている。

一般的に日本文化と呼ばれるものは数多く存在するが、それをどう理解し解釈するかは人により異なる。同じ文化を共有するグループに属していても、それぞれが個人的・主観的解釈を持っている(Piasecka, 2011)。Piasecka (2011)は、この文化理解の多様性が第二言語を教える教師にとって悩みの種であり、自らが主観的な文化理解を持つ状態でどのような文化要素を導入するかが課題であると述べている。このような課題を解決するため、本調査では日本語教育現場に関わる教師・学習者双方に捉えられている文化要素の解明を試みる。

方法

本研究では、二種類の質問紙調査を行った。質問紙調査1の対象者はアメリカの大学機関で日本語を学ぶ、もしくは学んだことのある学習者であった。質問紙調査2の対象者はアメ

リカの高校・大学機関で初級日本語を教えている、もしくは教えた経験のある教師であった。Fukunaga (2006)は、教師が日本語を学ぶ学生の視点を理解しカリキュラム作成に活かすためには、彼らの話を直接聞くことが必要不可欠であると主張している。この主張は学習者の視点獲得のみに限らず、教師同士が互いに視点を理解することもより良いカリキュラム作りに有益であると考えられる。よって、学習者・教師双方を対象とした質問紙調査によって得られるデータから日本語教育の現場で求められている文化要素を明らかにし、本研究のリサーチクエスチョンである「日本語教師が学習者の学習意欲を向上させるために、言語のクラスにおいて文化をいかに取り入れるべきか」という問いに答えることを試みた。

1. 学習者対象調査

学習者対象の質問紙調査は2012年9月～10月に実施された。参加者はアメリカの大学で第二言語として初級日本語を履修している学生であった。質問紙は日本語の授業終了後にコンセンストフォームと共に配布され、調査の目的やコンセンストフォームの内容が英語で説明された。質問紙記入にかかる時間は15分程度で、調査協力希望者は任意で回答した。質問は自由回答形式で、無記名であった(資料 A)。主な質問内容として、学習者が日本のどのような側面を文化として捉え興味を持っているのか、何故日本語を履修したのか、日本語の授業に期待することは何か、またそれまでの言語授業の中で印象に残っていることは何か、等を尋ねた。

この質問紙調査で得られるデータから、学習者の日本文化に対する視点を理解し、学習意欲を盛り立てるカリキュラム作りに役立てることを目的とした。本研究では、初級学習者を主な調査対象とした。初級日本語学習者は、生教材に自ら触れ理解を深められる機会が比較的少ない。そのため、本研究での調査対象を初級学習者とすることで、彼らの日本文化に対する理解・興味を言語授業の重要要素として見出したいと考えた。

2. 教師対象調査

日本語教師対象の質問紙調査は、2012年9月～11月に実施された。参加者はアメリカの高校・大学機関で初級日本語を教えている、もしくは教えた経験のある教師であった。調査手続きとして、まず調査協力を求めるメールが対象者へ送られた。その後調査協力希望者には改めて質問紙とコンセンストフォームが添付されたメールが送られ、調査参加者は、コンセンストフォームに目を通した後質問に回答し、添付ファイルとしてメールで返信した。質問は自由回答形式で、無記名であった(資料 B)。主な質問内容として、日本語教師が日本のどのような側面を文化として捉えているのか、文化要素を言語の日本語の授業内で取り入れることのメリット・デメリット、日本文化を積極的に言語の授業内で取り入れているか、また取り入れているとしたらどのように文化要素を選び取り上げているかを尋ねた。

この質問紙調査で得られるデータから、日本語教師の日本文化に対する視点や授業での取り組みを知り、学習者の日本文化に対する視点と比較することを目的とした。学習者対象の調査と同様、初級日本語に役立つ文化要素検出のため、教師対象の調査も初級日本語を教えた経験のある教師を対象条件とした。

結果と考察

学習者対象調査の参加者は 71 名、教師対象調査の参加者は 16 名であった。学習者対象・教師対象の両質問紙とも記入後回収され、それぞれのデータは調査者によってカテゴリー分類された。

1. 学習者対象調査結果

学習者対象調査の参加者は 71 名で、平均年齢は 21.1 歳であった。参加者の主な専門は、日本語・心理学・国際関係学・コンピューターサイエンス・フィルム&メディア学・歴史であった。全回答者のうち 13 名が以前日本に行ったことがあると回答した。

何故日本語を履修しているのかという質問に対しては、日本の言語と文化が好きだからという回答が最も多く、次いで将来日本に行きたいからという理由が挙げられた。また、日本人や日本と関わりのある親族がいることや、共通の興味を持つクラスメートと出会いたいという理由で日本語を履修する学習者もいた。これら日本語学習に対して前向きな理由は「言語の必修単位を埋めるため」という受動的な回答よりも多くみられた。

日本語の授業に何を期待するかという質問に対しては、言語（特に会話能力）を学ぶことを期待する回答が多かった一方、言語のみならず文化や慣習も学びたいという声も多かった。それまでの日本語の授業の中で印象に残っているものとしては、日本語での読み書きを学んだことが最も多い回答であった。一方、学んだ言語を授業外で実際に使用し、達成度を実感したことや、共通の興味を持つクラスメートと出会えたことを回答として挙げたものも多くあった。

2. 教師対象調査結果

教師対象調査の参加者は 16 名で、調査実施時の教師経験は 1～48 年であった。

日本の文化を意識的に言語の授業に取り入れていますか？という質問に対し、14 名がはいと答え、2 名がいいえと答えた。文化の取り入れ方としては、日本の美術・書道・スポーツや伝統的なおもちゃを紹介する等例がみられた。また、多くの回答者は、文化側面に関する知識を単に紹介するに留まらず、学習者の日本文化に対する知識理解を深めるようにディスカッション・比較分析を取り入れた授業づくりをしていると回答した。また意識的には文化側面を取り入れていないと回答した 2 名においても、「意識的には取り入れていないものの、文法などをよりわかりやすく説明する上で文化要素を取り入れることはある」と回答していた。

日本語の授業内でよく取り上げられている文化要素としては、非言語コミュニケーションやジェスチャー、マナーなどが多く挙げられた。これは調査参加者である日本語教師が非言語コミュニケーションの言語表現との密接な関わりを意識している結果だと言える。また授業で取り上げる文化要素として日本の祝日やイベントを挙げる回答も多かった。祝日やイベントをディスカッショントピックとして用い、日本での習慣や信条、歴史的背景などの理解を深めるという意見であった。また日本の宗教心や迷信についての理解を深めるために日本映画やテレビ CM を使うという例や、学習者自身に興味のある文化要素を調べさせ発表する機会を設けるといった例もいくつか見られた。

言語の授業で文化要素を取り入れることのメリットとして最も多かった回答は学習者

の動機付けにつながり言語学習そのものが刺激・促進されるという意見であった。また日本という国そのものへの興味や共感を高めるという意見や、文化要素を知ることが自然な言語表現の促進につながるといった回答も見られた。反対に言語の授業で文化要素を取り入れることのデメリットについては、「学習者の興味があることは何でも取り入れるべきだ」という意見がほとんどで、デメリットとなる文化要素の具体例は挙げられなかった。一方同質問に対しては、教師それぞれが持っているステレオタイプを押し付け日本文化に対する偏見を助長してしまう危険性を、文化を用いる際に気を付けなければならないこととする主張が多かった。「学習者が授業内で他文化要素に触れたとき、実際の多様性や人々の個性を無視した帰結をしてしまう可能性がある」という回答にみられるように、自文化の多様性を知りながら他文化は単一的なものであるという偏見の助長は避けるべきだとの意見は日本語教師から多く寄せられた。また時間的な制限や、授業でカバーしなければならない文法事項等と文化要素のバランスについての懸念も挙げられた。

学習者が日本文化を学ぶ理想的な方法としては留学が最も多く挙げられた回答であった。しかし同時に、留学はすべての学習者に機会が与えられるものではないため、機会の不均等さを懸念する声も多かった。その他の有益な学習方法としては、学習者が日本語を実践的に使うことのできる地域コミュニティとの交わりが挙げられた。この回答から日本語教師が ACTFL のナショナルスタンダードでいう **Community** を強く意識していることが伺える。

3. 学習者と教師が考える「日本文化」

「日本文化とはなんですか？」という質問に対する学習者・教師の答えをそれぞれカテゴリーに分けて分析した。カテゴリー分けには、**American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL)**で推奨されている **Culture** の 3 側面 ; **Perspectives, Practice, Products** を用いた。ACTFL では、外国語学習の中で文化要素を含めることが推奨されている。その取り入れ方として、**Practice** や **Products** などの一遍的な情報を伝えるのではなく、**Practice** と **Perspectives, Products** と **Perspectives** など物事の背景にある日本の視点にも目を向けるような深みのある導入が理想とされている。よって、これらの 3 側面は言語教育において個々に切り離して考えられるものではない。しかし本研究ではこれらをあくまでカテゴリーとして扱い、学習者・教師双方からの文化要素に関する自由回答を 3 種類に分類することとした。

4. 学習者・教師の捉える文化要素

「日本文化とはなんですか？」という質問に対し、学習者からの回答の中で最も多かった文化要素は食べ物であった。言語、アニメ/マンガ、歴史、マナーやポップカルチャーなどが次いで多い回答であった。また学習者自身が興味のある文化要素としては前出の他に音楽、宗教、美術、ライフスタイル、学校のシステムなどが挙げられた。

学習者にとっての文化要素をカテゴリー分類した結果、以下ようになり、学習者の捉える文化要素は特に **Products** に分類されるものが多いことが分かった。

Perspectives: 歴史・伝統・ライフスタイル・集団主義

Practices: 宗教・慣習・マナー・ポライトネス・しつけ

Products: 食べ物・アニメ/マンガ・祭り・音楽・映画・美術・盆栽・

ポップカルチャー・服/ファッション・テクノロジー・歌舞伎・ゲーム・
公共交通機関・マーシャルアーツ・建築

一方、「日本文化とはなんですか？」という質問に対する教師からの回答の中で最も多かった文化要素は言語であった。また、伝統や習慣、日本の人々の考え方、マナーなども回答として多く挙げられた。Products に多く注目が集まった学習者の回答とは対比的に、教師の回答には Perspectives に分類されるものが目立った。また教師による回答のもう一つの特徴として、文化要素を長文で説明する（何がどうしてどのように文化要素となりうるのか、等）傾向が強かった。これは文化要素を単語で挙げる傾向の強かった学習者の回答とは対照的な特徴であった。このような回答傾向から、教師の「何が」文化として導入されるべきかではなく「どのように」文化が導入されるべきかに対する大きな関心が浮き彫りとなった。

5. 日本語教育現場での文化の取扱いに関する考察

「今までの日本語のクラスの中で印象に残っていることはなんですか？」という質問に対し、多く見られた学習者の回答は日本語の読み書きを学んだこと、授業外で言語を実際に使用し達成感を得られたことなどであり、文化要素を学んだことを印象深い例として挙げる声は少なかった。つまり、学習者対象の調査では「日本語の授業に期待すること」に文化要素が挙がっていた一方で、「授業内で印象に残っているもの」には文化要素があまり挙げられなかったという結果である。では日本語教師は学習者の文化に対する期待に応えられていないのであろうか。

教師による文化教育への取り組みについての質問回答をみると、そうとは言い切れない。「意識的に文化要素を取り入れている」と具体例も交えて答えた教師は 16 人中 14 人であり、かなり高い割合だといってよい。それでは、合致するはずの学習者の期待・印象・教師の取り組みのズレはどこから来るものであろうか。ここで本研究は前項で述べられた学習者と教師の文化要素に対する視点の違いに着目する。

日本語の初級学習者は日本文化の物的な部分をより「文化」として意識している一方、教師は物的なものや習慣の背景にある視点・考え方を「文化」として意識していた。この意識する点のズレが日本語の授業内で文化が学ばれるときに学習者・教師間にズレをもたらしているのではないかと考える。すなわち、教師が導入した日本の視点・考え方などの目に見えない「文化要素」を、物的部分に着目する初級学習者が見過ごしてしまう可能性があるのではないだろうか。

この視点のズレを解消するため、初級日本語の授業では言語要素のみに限らず文化要素に関しても学習者の視点に立った明確な学習目標の設定が求められる。わかりやすく明確な学習目標の設定は、学習者が授業から何を学ぶことができるのかを理解する指標になる。またそれと同時に、教師が学習者に期待する学習ゴールを自他ともに示す機会でもあり、学習者・教師双方に有益なものである。前述のズレを解消するためにも、特に初級日本語では教師が着目しがちな Perspectives の文化側面だけでなく学習者の Affective filter に合わせた Products や Practices の文化側面も明示することが重要と考える。

本研究において浮き彫りになった文化教育に関するもう一つの懸念が、ステレオタイ

プの助長である。教師からの回答では、教師自身が持つ日本についてのステレオタイプを無意識的にでも学習者に押し付けてしまうことへの不安や、誤った文化理解を提示してしまうことへの懸念が多く寄せられた。これは、自分一人では多岐にわたる日本の文化をすべて正しく理解することはできないという自意識から生じる懸念である。Fukunaga (2006) も、教師が学習者と対話を繰り返し、彼らの視点を理解することが教師のより良い文化理解にとって大変有益であることを伝えている。教師の抱える不安を少しでも解消するためにも、学校や地域を越えた教師間、及び学習者と教師間の立場を越えた「日本文化とは何か」という議論の機会が各地で設けられ、より広く深い文化理解を導く授業づくりへのきっかけとなることが期待される。

今後の研究への課題

本研究はその質問の大部分が自由回答式であったという特徴から、幅広い回答が得られた一方で、そのカテゴリー分類に関しては研究者の主観から抜け出せなかった節がある。また、質問紙調査後のフォローアップインタビューなどを設けていなかったため、調査参加者の回答を研究者が正確に読み取ることができたかについても疑念は残る。今後の研究では、自由回答式という特徴を守りつつもより体系化された分類基準をあらかじめ設定することでより信頼性・妥当性の高い調査を期待したい。

参考文献

- American Council on the Teaching Foreign Languages. (2013). *Standards for Foreign Language Learning in the Twenty first Century*. Retrieved from <http://www.actfl.org/i4a/pages/index.cfm?pageid=3392>
- Cakir, I. (2006). Developing cultural awareness in foreign language teaching. *Turkish Online Journal of Distance Education*, 7 (3), 154-161.
- Derenowski, M. (2011). Strangers in paradise: The role of target language culture in foreign language teaching materials. In J. Abraski & A. Wojtaszek (Eds.), *Aspects of Culture in Second Language Acquisition and Foreign Language Learning* (pp.273-285). doi: 10.1007/978-3-642-20201-8_3.
- Fukunaga, N. (2006). Those anime students: Foreign language literacy development through Japanese popular culture. *The Journal of Adolescent and Adult Literacy*, 50(3), 206-222. doi:10.1598/JAAL.50.3.5.
- Makino, S. (2009). Towards construction of culture acquisition theory. *Acquisition of Japanese as a Second Language*, 12, 5-27.
- Modern Language Association. (2007). *Foreign Languages and Higher Education: New Structures for a Changed World*. Retrieved from <http://www.mla.org/flreport>

- Otwinowska-Kasztelanic, A. (2011). Do we need to teach culture and how much culture do we need? In J. Abraski & A. Wojtaszek (Eds.), *Aspects of Culture in Second Language Acquisition and Foreign Language Learning* (pp.35-48). doi: 10.1007/978-3-642-20201-8_3.
- Piasecka, L. (2011). Sensitizing foreign language learners to cultural diversity through developing intercultural communicative competence. In J. Abraski & A. Wojtaszek (Eds.), *Aspects of Culture in Second Language Acquisition and Foreign Language Learning* (pp.21-33). doi: 10.1007/978-3-642-20201-8_3.
- Suntayopas, S. (2011). Differences between Japanese native speakers and Thai native speakers in terms of acknowledgment and usage. *Journal of Global Education*, 2, 37-55.
- Ziebka, J. (2011). Pragmatic aspects of culture in foreign language learning. In J. Abraski & A. Wojtaszek (Eds.), *Aspects of Culture in Second Language Acquisition and Foreign Language Learning* (pp.263-272). doi: 10.1007/978-3-642-20201-8_3.

資料 B

Teacher Survey Sample

Date / /

- 1) How old are you? []
- 2) What level of Japanese are you currently teaching?
(Example: higher education, beginners level...)
[]
- 3) How long have you been teaching Japanese in total?
[]
- 4) What does “Japanese culture” mean to you?

5) Do you teach Japanese culture intentionally in your language class? Yes / No

(If Yes) How do you teach cultures in your class? (a few examples, if applicable)

How/why do you choose the specific culture as a representative of Japanese culture? (If applicable)

- 6) What do you think are the advantages of using cultural materials in a language class?
- 7) What do you think are the disadvantages of using cultural materials in a language class?
- 8) Among all of the Japanese culture you see, what your students should learn?
- 9) Among all of the Japanese culture you see, what your students should not learn?
- 10) What do you think is the best way for students to learn Japanese culture? Why?